

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	都竹 晃文
主論文の題目 および 掲載・審査委員名	題 目 CT Assessment of Lobar Heterogeneity and Fissure Integrity in Pulmonary Emphysema for Bronchoscopic Lung Volume Reduction with Valve. (気管支バルブ療法に対する肺気腫の葉間不均一と葉間裂完全性の CT 評価)
	掲載誌 Journal of St.Marianna University 2014; 5: 77-83
	主査 伊東 文生
	副査 松田 隆秀
	副査 宮川 国久
[論文の要旨・価値] 重症 Chronic Obstructive Pulmonary Disease (COPD) 患者に対する気管支鏡治療が進歩している。気管支バルブ治療は一方向弁を気管支に挿入し、気腫が進行している肺葉からの空気を抜き、健全に近い肺葉の肺機能を発揮させる治療法である。同法は欧米では臨床試験の報告があるものの、本邦ではこれから臨床試験が開始される。先行する論文によると気管支バルブ治療の効果は葉間不均一な群と葉間裂の完全な群において治療効果が高いことが報告されている。これらの報告により適応選択のアルゴリズムが Shah らや峯下らによって示されている。本研究では、COPD 症例につき CT 画像を用い、葉間の気腫の不均一性によって分類し、次に葉間裂の完全性によって分類した。CT 画像の客観的評価のためにアポロソフトウェアを用い、画像を数値化して検討している。示された数値に基づき、それぞれの肺葉の気腫に 5 段階のクラスで分類、2 段階以上差がある例を葉間不均一性ありとした。また葉間裂の完全性は％で表示し 80％以上の症例を葉間裂完全性ありと判断した。40 例の肺気腫患者を用いた検討で、葉間不均一性ありは 5 例、その中で葉間裂完全性ありは 2 例で、気管支バルブ治療の適応は 2 例と判断された。本研究は、重症 COPD 治療に今後期待される気管支バルブ治療の適応評価を客観的に行うことを示したものであり、今後の臨床試験の患者選択に寄与しうる臨床的に重要な知見を示していると考えられた。	
[審査概要] 平成 27 年 2 月 19 日 14 時より、主査、副査、宮澤教授を含む数名の陪席者出席のもと行われた。20 分間のプレゼンテーションの後、40 分の質疑応答が行われた。審査員から COPD の一般的知識、アポロソフトウェアについて、結果の解釈について、適応数が少ないことなど多岐にわたる質問があった申請者はきわめて懇切丁寧にかつ明確に回答した。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 研究遂行能力は十分あり、当該研究領域の知識は十分であり、今後の課題の検討、さらには将来展望についても明確な考えを示すことができ、高い研究能力、専門知識と語学力を十分に有するものと判断した。英文読解力は、指定した英文文献の和訳によって評価したところ十分な読解力があつた。以上より、学位授与に値すると判断した。	